

まちあるきに着目した市街地観光に関する実態調査
－高松市における「まちあるき漫遊帖」の事例－

実査日：平成 27 年 10 月 29 日

報告者：財団法人都市化研究公室研究員岩間真二

1. はじめに

全国的な少子高齢化の進行および総人口が減少していく中、三大都市圏に代表される都市部に比べて地方都市においてはその傾向が、顕著になってきている。

地方都市に於いて前述の状況を劇的に変化させることができない中で、いかに地域再生を行っていくかが、大きな課題となっている。

端的に言えば、地域経済をいかに上手く回していくかということであるが、地方部において郊外型の大型商業施設の立地等において、従来の中心市街地における個店を中心とする商店街の衰退が顕著になってきており、地域の経済のパイの奪い合いで出遅れた状況になっている。

1970 年代に比較して、住宅地の新規開発やモータリゼーションによって居住地が郊外化しており、中心市街地においての人口密度が減少しており、徒歩圏を中心とする商業形態である商店街の衰退に拍車をかけている。しかしながら、モータリゼーションの恩恵を受けられない、高齢者や若年層においては、地方都市に於ける公共交通機関が貧弱である以上、徒歩圏の商業需要にこたえるという役目を商店街が負っているとも考えられる。

このような状況への対策として、産業振興や交流人口の増加による外部経済の導入があげられる。その中で、地域としての波及効果が広い交流人口の増加について検討していく。具体的には観光等が挙げられるが、従来型の観光資源によるものには限界が来ているため、新たな地域資源が求められている。このような需要にこたえているものの一つが街歩きや散策と言われる、地域そのものを地域資源と考えるもので、市街地観光などと呼ばれている。

本稿では市街地観光やまちあるきによる観光について調査を行うため、高松市のまちあるき漫遊帖を取り上げ、高松市観光交流課、まちあるき漫遊帖による実際のまちあるき及びガイドへのヒアリングを行い、検討していくものである。

2. 高松市について

- 概要

高松市は、香川県の県庁所在地にして、四国最大 42 万の人口をもつ都市で、高松城下において栄えた都市であり四国の玄関口となっている。また瀬戸内海に面し対岸にある岡山とは瀬戸大橋が開通する前から宇高連絡船により盛んな交流が

あった。

高松市の主な観光資源としては、源平合戦の古戦場である屋島、栗林公園、高松城などが挙げられる。

高松市の中心市街地は、南北に8商店街およそ2.7kmにわたりアーケードが続いており総延長は日本一の長さを誇っている。

その中で、丸亀商店街では再開発が街区ごとに連続して行われ、まちづくり会社が商店街全体をマネジメントすることにより、所有権と利用権を分離し適切なテナントミックスを実現し、商店街が一体となったショッピングセンターとして機能するようにし、来街者の増加を促す仕組みになっているのが特徴的となっている。



高松市丸亀の再開発

3. 高松市におけるまちあるき観光「まちかど漫遊帖」について

本節では、高松市観光交流課へのヒアリング及び、ガイドの埜氏のまちあるきへの参加及びヒアリングを行ったものをまとめたものとなっている。

- まちかど漫遊帖について

まちかど漫遊帖は、2006年に始まり2015年秋に丸10年を迎えている。長崎さるく博に触発されて始まったということである。高松まちかど漫遊帖実行委員会によって運営されている。開始当初は県や市が主体となってまちあるき観光を行うために設立し、ガイドの育成等を行っていたが、県の関与がなくなり、主体を行政からガイドへ実行委員会の主体が変遷している。

現在、市では必要な手続きや、ガイドの保険やパンフレット制作費等の援助にと

どまっている。

実行委員会は現在、会長(プロデューサー)と役員 10 名程度で構成されており、ガイドは 50 名程度ということである。総合プロデューサーとして、るいまま氏がコーディネートをしている。

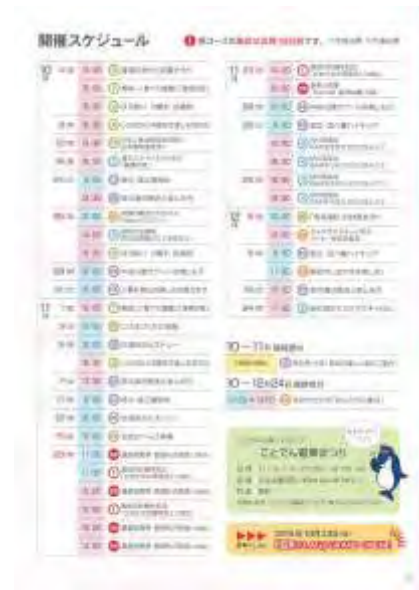
運営としては、市の補助金(約 250 万円程度)及び、コース料金、パンフレットの広告料金が主な収入となっている。補助金のほとんどがガイドの保険料及びパンフレット印刷費となっている。コース料金のうち、実行委員会の運営費として 250 円/名、そのほかが必要経費およびガイド収入となっているが、ほとんどが必要経費となっているということである。トータルとして赤字ではないが繰り越しもほとんどないといった収支ということである。

ガイドの育成は、基本的に OJT によって行われており、講義的に決まった座学等を行われていないとのこと、年に 1 回の募集を行い、数名の応募及びガイドからの紹介などにより補充している。

実行委員会は任意団体であるが、これとは別に玉藻公園・屋島山上・サンポート高松では観光ボランティアガイド協会が別途あり、観光地におけるガイドを行っている。また国際会議等の誘致や、インフォメーションプラザを運営、観光振興等を行う高松市コンベンションビューローもありそれぞれ別の役割を持っている。

- まちかど漫遊帖のコースについて

まちかど漫遊帖は春と秋の年 2 回開催されており、春は 4-6 月、秋は 10-12 月に開催されている。



パンフレットとコース・スケジュール

コースについては 2015 年秋では、24 コースと 5 つの特別コースがあり、まち

あるき、体験・講座などがある。開始当初はまちあるきが主体であったが、体験型が近年増えてきているということである。2015年春の実績として248名の参加があったということである。

基本的に、スケジュール固定の事前申し込み式で、随時受付のコースは2コースである。ガイドとコースはセットになっており、他のガイドが行うことはなく、事例が多くあるコースにガイドが付くのではなくガイドとコースがセットである点が特徴的である。

- まちかど漫遊帖のまちあるき

数多くあるコースのうち、実査日に可能であった随時受付の「旅の州、さあ！高松の楽しい街にご案内！」のコースを歩いた。ガイドは初期のころからガイドとして活躍している埜氏によるもので、コースの中ではもっとも市街地観光に近いものである。



ガイドの埜氏

コースは、高松駅前を出発し、アーケード商店街を中心に街を散策するもので途中、讃岐うどんや、地元での食事も含まれている。中心市街地の歴史等も含めたコースとなっている。時間や食事の有無等や、参加者の興味等によって随時コースを変更しているということである。



老舗のかまぼこ屋



商店街の猫なども解説



仏具店で旧地図



ブッチーニの小路

ブッチーニの小路は地元の人が活性化等を願って、東京の「モーツァルトの小路」をモチーフに作ったなどと地域の知られざる情報や、果物屋のもとバナナの熟成室の地下室の入口など地域のガイドがなければ、行けないような内容も含まれている。



バナナ問屋の表記が珍しい



熟成室の地下室の入口

以上のほか、地元ならではの情報が盛りだくさんのまちあるきであった。

4. おわりに

まちあるき漫遊帖は、パンフレット作成等の補助はあるにせよ、非常に行政の関与が少ない組織で運営されている。本稿の地域再生レポートでは過去に徳島、高知などの事例を紹介しているが、それらは観光協会とボランティア団体が連携して運営されていること、また当該市におけるガイド全般を担っているものと比較して、実行委員会は基本的に任意団体であり、強くないものの市が直接関与している点において相違がみられる。

その他、前述のとおり、ガイドとコースがセットになっており、基本的にはその自主性に任されており、それが特徴的であるものの、継続性についてはコースごとにそれぞれ後継者を育成していかななくてはならない点において代替性に若干の懸念があるが、逆にそれがコースの独自性となっている面も考慮する必要がある。この点は、以前紹介した京都の「まいまい京都」に近い形であると言える。

また、高松市において、漫遊帖ではガイドは基本的に OJT で行っていくということである。ほかに高松城などのボランティアガイドがあるがこちらは同じ場所で一定のガイドを行うため講習等があるということである。

また高松市に関しては県の観光協会、コンベンションビューローはあるが市の観光協会がなく、漫遊帖を含めその担当は観光行政全般を行っている市の担当課となっている。観光全体をみる統一された組織か、各主体の連携が今後、来訪者を増やしていく上で重要になってくると思われる。